

「国旗」と“the Flag” ——太平洋戦争中の日系アメリカ俳句——

荒木 純子

はじめに

次の冗談にどのような人がお腹を抱えて笑うことができるだろうか。

“Knock, knock.”

“Who’s there?”

[“Shu Shingu.”]

“Shu Shingu, who?”

“Shu Shingu-ra!”

これは日系アメリカ人作家ヒサエ・ヤマモトが10歳のときに創作し、文芸誌 *Collier's Weekly* に投稿したという探偵小説 “Death Rides to the Rails to Poston” に出てくるもので、英語圏でとくに子どもに好まれる、一般的に “Knock-knock jokes” と呼ばれるパターンを踏襲した日本語の駄洒落に近い冗談である¹⁾。日本軍による真珠湾攻撃後、大統領行政命令 9066 号により立ち退きを迫られた西海岸の日系アメリカ人は、Relocation Center と呼ばれた10の収容所に集められた。この短編はその一つがあったアリゾナ州ポストン (Poston) でヤマモト自身が編集に加わっていた収容所内の新聞 *Poston Chronicle* に、7回にわけて掲載されたものである。Knock-knock jokes は英語環境に育った者でないと反射的に笑うことはない。また「シュウ・シングラ」は「忠臣蔵」にかけているが、日本文化に精通していないとオチはわからない。「シュウ・シング」はヤマモトの短編の主人公である探偵の名前だが、日本流に「シング・シュウ」と姓名を並べ替えてみてもなじみある日本の名前には聞こえない。これらの面からこの knock-knock joke は非常に苦しい冗談だといえる²⁾。

さらに、knock-knock jokes は最初にあげた五行の形で正しいパターンになった冗談となるが、タイプ打ちの謄写版新聞にのった現物から、三行目にあるべき “Shu Shingu.” が実際には抜けている。冗談としてのパターンが崩れているため、このヤマモトの短編中の冗談はたいへんわかりにくい。仮に knock-knock jokes をおもしろいと思い、忠臣蔵と書いて日本への郷愁を感じるような日米両方の環境で育った者でも、笑うためには一度頭

¹⁾ Hisaye Yamamoto, “Death Rides to the Rails to Poston” *Poston Chronicle* 24 Jan. 1943. なお、ヤマモトが10歳であった1931年前後数年の *Collier's Weekly* に、“Murder Story” という題で投稿したというこの短編に該当するものはみあたらない。Knock-knock jokes の例としては、たとえば “Knock, knock.” / “Who’s there?” / “Ice cream.” / “Ice cream, who?” / “Ice cream if you don’t let me in.” など。

²⁾ なお、筆者の友人で日本史専攻のアメリカ人 Noell Wilson にこの冗談を話したところ、しばらく笑いが止まらなかった。彼女の分析によれば、論理を身につける前の遊びのため、今でも弾みで笑ってしまうのだそうである。

で解釈しなければならない。幼いやまもとの勘違いであれ、他の人によるタイプの単なる間違いであれ、この中途半端な knock-knock joke は日米文化の相互理解の難しさを象徴的に表している。

言語にはそのことばと連動する特定の文化理解が存在する。言語は高度に差異化された一組の記号であり、それによって同じように差異化されている「もの」の意味を伝える。すなわち普遍的な一つの意志伝達手段というより、文化を伝える媒体が言語なのである³⁾。よって日本語でアメリカの文化を、英語で日本の文化を語るとき、翻訳不可能なものも存在する。すると、英語と日本語という二カ国語環境、つまりアメリカと日本の両方の文化で育った日系アメリカ人による文芸作品は、書かれた言語、作家の育った環境に応じて、ふさわしい読みが必要である。本稿では、太平洋戦争中の日系人収容所の一つ、カリフォルニア州北部のトゥーリレーク (Tule Lake) 収容所に関連する俳句集『記念俳句集』『選暦』から、旗・国旗を詠んだものを取りあげ、それらにこめられた日系アメリカ人の思いを分析することを試みる⁴⁾。

トゥーリレーク収容所は1942年5月に開かれたが、全米の日系人収容者を出所させるための調査という名目で行われたいわゆる忠誠テストの質問27と28に“No” “No” と答えた収容者を集め、改めて1943年10月に隔離収容所となった。質問27では合衆国軍に入隊して任務を遂行する意思を問い、質問28ではアメリカ合衆国に対し無条件の忠誠を誓って日本国天皇に対する忠誠を放棄するかを尋ねていたが、これらは日系人の間に大きな混乱と葛藤を巻き起こした。というのも、日本への忠誠の放棄は、帰化が認められていなかった移民の日系一世にとっては国を失う可能性を意味し、アメリカ生まれの米国市民にとってはそもそも放棄すべきものが存在しないため、迷いが生じる。また、従軍の意思については、答え方次第で戦場で家族同士が銃を向けることもあり得たからである。そんな背景の中、トゥーリレークでは両方の質問ともに“No” と答えた人の割合が全米10の収容所中最も多かった。従ってアメリカからみていわば「不忠誠者」の最も多いのがトゥーリレーク収容所ということになり、“No” “No” と答えた人たちをそこに全米から集めることになったのだった。『記念俳句集』はこれらの質問に“Yes” “Yes” と答えた人が他の収容所に移ることによってトゥーリレーキ吟社同人が離散するのを惜しみ、安井亜狂と林秋夕がそれまでの作品を選んで出版したものである⁵⁾。トゥーリレーキ吟社は毎週金曜夜に集まって活動し、収容者同士のまとまりを生むようにと二カ国語で発行されていた新聞に“Mr. Yasui, advisor” が選んで載せていた⁶⁾。俳句や短歌の創作は収容所において愛好者数が増えたが、それは日系アメリカ人の歴史の中で初めて「余暇」と呼べる時間がとれたからだった⁷⁾。よって作者は素人がほとんどで、『記念俳句集』の編者もその「緒言」に「玉石混淆のきらいなきにしもあらねど、もとこれ我等の記念の編纂なるがためなり」と書き残して

³⁾ Werner Sollors, “For a Multilingual Turn in American Studies,” *ASA Newsletter* Jun. 1997.

⁴⁾ 俳句中の旧漢字については常用漢字に統一して表記している。また土地名の Tule Lake は現地発音に近いトゥーリレークを採用しているが、「トゥーリレーキ吟社」は当時の日系人が使っていたのでそのまま表記する。

⁵⁾ 「緒言」、安井亜狂・林秋夕編『記念俳句集』(トゥーリレーキ吟社、1943)。以降この句集からの引用は、本文中に頁数のみ括弧にて示す。

⁶⁾ *Tulean Dispatch* 4 Aug. 1942.

いる。

俳句は世界で最も短い定型詩の一つである。たった十七音字の中に感情が凝縮されている。季語を初めとする句中の詩語には、日本語のそのことばの持つ特定のニュアンスがあり、それを前提として私たちは俳句を鑑賞している⁸⁾。忠誠テストへの回答のときだけでなく、さまざまな状況で自らのアイデンティティを直視することを迫られた戦時中のトゥーリレークにおいて、日本語十七音字の中に忠誠心の一番の象徴となりうる国旗を詠んだ日系人は、何を思っていたのだろうか。そう考えると、トゥーリレークの日本語俳句は彼らのアイデンティティを探る上での貴重な証言となる。ただし、これらの俳句集はたまたま筆者が図書館で見つけた私家版のものである。日系アメリカ文学研究の篠田佐多江による、アメリカで出版された日本語文学作品のリストにこれらの句集は挙げられていない。また戦時中に出版されている句集も他にはない⁹⁾。よってこれらが戦時中の日系アメリカ俳句の代表であるとは必ずしもいえないまでも、その史料価値を見過ごすにはあまりに稀少なものと判断されるので、ここに取りあげたいと思う。

俳句という形式と日本のイメージ

『記念俳句集』の中に、1943年元旦の句として次のようなものがある。

初国旗高くシャスター巖かに 秋夕(2)

「シャスター」とはトゥーリレークにある山の名前、作者の秋夕は日系収容者の一人である。アメリカ戦時転住局の管轄下にある収容所という場所柄、この「国旗」はアメリカの国旗、星条旗以外にはあり得ない¹⁰⁾。ひとまず実際の光景を考えながら解釈すると、日系アメリカ人である作者がその年初めて空高く掲揚された星条旗を見上げ、背後にそびえる神々しい山を拝みつつ、身の引き締まる思いで新年を迎えているという状況を思い浮かべることができる。

秋夕の生涯についての史料は見つかっていないが、『記念俳句集』の編者であることからおそらく日本からの移民である一世か、アメリカ生まれだが日本で教育を受けた帰米二世の、日本語と日本文化に長じた人であると考えられる。日本語での創作活動は一世が中心であった。トゥーリレーク収容所新聞の英語面には“a group of issei haiku enthusiasts”という表現がみられ、また日本語面をみても俳句や短歌などの文芸は「一世倶楽部」が主催していた¹¹⁾。しかし帰米二世も日本語創作に携わっていたようで、日系アメリカ人自身も一世と帰米二世をほとんど同等に見なしていたようだ。後に日系アメリカ人の手で編集

⁷⁾ Violet Kazue Matsuda de Cristoforo, comp., trans., and prefaced, *May Sky, There Is Always Tomorrow: An Anthology of Japanese American Concentration Camp Kaiko Haiku* (Los Angeles: Sun & Moon, 1997), 29; 篠田佐多江「文学・フィクション」「日系人——受け入れと定着に関する諸問題」、移民研究会編『日本移民研究史——動向と目録』(日外アソシエーツ、1994)、138。

⁸⁾ 川本皓嗣『日本の詩歌の伝統——七と五の詩学』(岩波書店、1991)、73。

⁹⁾ 篠田「文学・フィクション」、141-47。

¹⁰⁾ たとえば収容されていた画家 S. Mikami による油絵によると、トゥーリレークの収容者たちが住むバラックを上から見下ろすようにして、アメリカの国旗が掲揚されている。Matsuda, *May Sky*, 69 より。

¹¹⁾ *Tulean Dispatch* 4 Aug. 1942; 8 Jan. 1943.

された文芸集 *Ayumi* では一世、二世、三世・四世、図画とわけて作品が配列されて、最後に全作品の制作者について短い紹介がある。それによると一世とされる 28 人のうち 4 人が実は帰米二世であり、逆に二世の部に帰米二世の作品は含まれていない¹²⁾。

とすると 21 世紀初めの日本人である筆者が最初に読んで思い描いた次のような情景も、あながちはずれてはいないのかも知れない。季語「初国旗」とは正確には元旦に公私を問わず門前に国旗を掲揚することだが¹³⁾、「初」から即座に正月を連想し、「国旗」からは日章旗を思い描いた。またシャスター山を神格化しているようすから、富士山のような円錐形の山が筆者の想像の中に浮かび上がってきた。いかにも海外向けの絵はがきにでもありそうな、富士山を背景に日の丸がはためくという情景が思い浮かんだのだった。なお実際のシャスター山は、写真で見ると限りどことなくハヶ岳のような印象を与える¹⁴⁾。

考えてみると、この連想の根底には日本語の「国旗」ということばから無意識に日章旗が引き出されてきたことがあるように思う。この俳句を英語に翻訳しようと、たとえば日系三世・四世で日本語が得意でない人に説明するとき、「国旗」を“the National Flag”あるいは“the Flag”と表現したらこういうことは起こり得ない。アメリカ人が子供のうちから毎日学校で“I pledge allegiance to the flag of the United States of America, . . .”と繰り返し繰り返し唱えるように、“the Flag”は星条旗と自動的に結びついてしまうからである。ただし、この英語的連想の方が秋夕の目の当たりにしている風景としては正しいのがこの句のおもしろいところである。

国旗は最もナショナリスティックな象徴となりうる。北米で詠まれた短歌を集めて大岡信が編集した『北米万葉集』の中にある、旗を題材にしたいくつかの短歌にもそれは表れている¹⁵⁾。

日章旗はためく下に書かれたる NANBU JAPAN の名は輝けり

森本田鶴子 (44)

この国に長くし住めば星条旗敬ひ仰ぐ親しみの沸く

原田三鈴 (322)

打揚ぐる弾はハチけて日米の国旗飛び出て空を舞ひ行く

福井万可 (136)

星条旗に忠誠なれと野村大使大き御言葉我等にたまふ

緒方喬 (156)

背一ぱいに日の丸のシャツを着せられて有頂天になりしが射殺の目じるし

中野雨情 (384)

テネシーのレブナン町の店の前我が眼とらへぬ血染めの日の丸

岡崎義弘 (474)

¹²⁾ Janice Mikiritani, ed., *Ayumi: A Japanese American Anthology* (San Francisco: The Japanese American Anthology Committee, 1980), 257-70.

¹³⁾ 「初国旗」『図説俳句大歳時記 新年』(角川書店、1973)。

¹⁴⁾ John Myers, “Mount Shasta, Tule Lake California” in Gary Okihiro, *Whispered Silences: Japanese Americans and World War II* (Seattle: University of Washington Press, 1996), 45.

¹⁵⁾ 大岡信編『北米万葉集——日系人たちの望郷の歌』(集英社新書、1991)。なお、本文の次の六首の歌に続く括弧内の数字はこの歌集の頁数である。

初めの四首は戦前のものである。一首目は1932年ロサンゼルス五輪の三段跳びで金メダルを獲得した南部忠平選手のこと。優勝で掲揚される日の丸に日本人の誇りが重ねられている。二首目は長く住んだ土地の国旗に対するなじみを詠いつつも、自分は異邦人だという意識が残っている。三首目には来たるべき日米両国の交戦がえがかれている。また四首目は在米大使から在米日本人に対して居住国への忠誠をうながす天皇のことばが伝えられたことをうたっているが、逆にいえば、そのようなことばがないと悪いことが起きるかもしれないという一触即発の状況がそこからうかがえるのである。これら三首目、四首目の歌には、悪化の一途をたどる日米関係を背景に、緊迫を増すナショナリズムがみてとれる。戦中の残り二首では、日の丸が「射殺」「血染め」と明らかに敵性外国人の象徴として詠まれており、政治的意味合いが色濃く映っている。

一方、アメリカ人の星条旗に対する誇りも同様に存在する¹⁶⁾。それゆえ米国民である日系二世の間では旗をめぐる戸惑いがみられ、忠誠テストのことが題名についた“Question 28”という英文エッセイには、アメリカの国旗に触れて誓うことや国歌斉唱に帽子をとって立ち上がることは忠誠心の本質ではないとある¹⁷⁾。最初の「初国旗」の句の作者秋夕は、別の句において「星条旗」ということばそのものを使っていることを考えると、「初国旗」における「国旗」ということばの選択は意図的に行われたと思われる。この句の奥には太平洋戦争中の日系アメリカ人たちの、アイデンティティをめぐる複雑な思いが渦巻いているようである。

とはいえ、この「初国旗」の句には収容所にいた日系人が強く感じていたのではと予想されるアメリカというものへの反発や置かれた状況に対する悲哀の感が希薄である。そのような反発・悲哀といった想像に込められるものとしては、次のような句があげられる。

希望のない窓からさつきぞらあしたもある 尾崎寧次

(From the window of despair / May sky / There is always tomorrow)¹⁸⁾

いつ出られるかわからない鉄柵に囲まれた収容所内の、仮小屋の小さな部屋の窓からふと作者が空を見上げると、五月の晴れわたった空があった。そこにほんのひとにぎりの希望をみよう、明日もある、そして明日こそきっといいことがあるかも知れないと思ってみる。収容所内外の情景のコントラストをもとに悲しさ辛さが直截に表現されており、読み手がたいへん感情移入しやすい句である。

この「あしたもある」の句は、アーカンソー州ロウワー (Rowher) 収容所からトゥーリレークへ移ってきた俳人の一人、松田一恵がまとめた同人句集 *May Sky, There Is Always Tomorrow* の表題句である。松田は戦時中の俳句の特徴を、各詩人の戦前の作品とは対照的に収容者の嘆き、鉄柵の中の圧迫された生活、日々直面する悲劇から生まれる悲しさが表現されていると、句集の中で解説している¹⁹⁾。この句集に収録されている句はたしかに

¹⁶⁾ 時代は下るが1960年代後半から70年代前半にかけ、政府や現体制への講義の意思を徴兵カードや国旗を焼くという行為によって表現しようとする事件が頻発した。たとえば、連邦最高裁判所における *Street v. NY* など。榎原猛「象徴的表現」『別冊ジュリスト英米判例百選Ⅰ公法』(有斐閣、1978)、114。

¹⁷⁾ Shuji Kimura, “Question 28,” *Tulean Dispatch Magazine*, Apr. 1943.

¹⁸⁾ Matsuda, *May Sky*, 222-23.

¹⁹⁾ Matsuda, *May Sky*, 30.

悲しさや嘆きが多くうたわれ、秋夕の「初国旗」の句の感情が一目ではわかりにくいのは、趣を異にする。

ただ、松田の同人と秋夕との作風の違いは俳句自体の形式に基づく可能性もある。松田の編集した句集 *May Sky* は日本の俳句機関誌『海紅』の流れを汲む自由律俳句運動の一派のものである。海紅一派の中心人物中塚一碧楼は、師匠の河東碧梧桐にならい、第一印象・直接表現の句を目指した。1915年の『海紅』創刊号では「ハートからハートに響く様なもの」を句に詠むことを、一碧楼自身が奨励している²⁰⁾。確かに松田の例には字数などの決まり事にこだわりはみられず、また「希望ない」という感情も率直に表れている。そのため定型を守り情景に思いを語らせようとする秋夕の句とは、与える印象が違うことは十分に考えられる。秋夕が星条旗を「国旗」と詠んだ句は、定型俳句の句形と伝統に守られ、厳かで静かな日本的な正月のイメージを醸し出しているのである。

秋夕の「初国旗」の句にはアメリカへの反発がないだけでなく、アメリカでの日本語の短詩形式文学一般に多いといわれる望郷の念、生活のつらさ²¹⁾も読みとりにくい。むしろ苦しいはずの現状を落ち着いて受け入れ、なるべく明るい面をみようとする姿勢が前面に出ているようである。大岡信は「短歌を通じてみるかぎり、収容所での生活は概して安定したように思われます。歌にも落ち着きが感じられ、のどかな雰囲気すら漂ってきます」と『北米万葉集』中の概説で述べている²²⁾。秋夕は句中、シャスター山を「厳か」と表現し年初めに神前でいずまいをただすような感覚でとらえている。民衆による山岳信仰は古代から日本中にみられたが、この句には時空を越えたそのような信仰心がみられる²³⁾。

『記念俳句集』中のシャスター山についての他の句にもこの傾向は当てはまる。

シャスターは神の一人子五月晴れ 秀女 (53)

シャスターに尻向けて引く大根かな 雪香 (78)

一句目はシャスター山をあがめるときに「神の一人子」とキリストにたとえて神性を表現している点が印象的である。作者の秀女は前年の年末に洗礼を受けてキリスト者となったことを同じ『記念俳句集』の中の別の句で詠んでいる²⁴⁾。日本古来の神体である山と、キリスト教の唯一神の創造物である山に対する畏敬の念が渾然一体となり、彼女の信仰心を引き起こしている。二句目には神である山に尻を向けるのは失礼だという暗黙の了解がある。作者はしゃがみ込んで大根を引き抜くのに懸命で尻が山に向いていることに気づいていない。そんな不作法を恥じていることを詠みながらも、どことなく愉快的な印象を与える句となっている。このように、のんびりとした雰囲気や日常のささやかな感動が収容所の俳句にはみちあふれている。

²⁰⁾ 上田都史『自由律俳句とは何か』(講談社、1992)、68-73、80-93；竹下竹人「自由律派——一碧楼・和霧・桜碗子」宮田戊子変『近代俳句研究』(楽浪書院、1934)、349；中塚一碧楼『海紅』阿部喜三男『河東碧梧桐』(桜楓社、1964)、77からの二次引用。

²¹⁾ 篠田佐多江「アメリカの日系日本語文学：文学雑誌を中心に」篠田・山本岩男編『日系アメリカ文学雑誌研究：日本語雑誌を中心に』(不二出版、1998)、71。

²²⁾ 大岡信「『北米万葉集』矛盾した心のねじれを歌う」大岡信編『北米万葉集』、22。

²³⁾ たとえば Ichiro Hori, Joseph M. Kitagawa and Alan L. Miller, eds., *Folk Religion in Japan: Continuity and Change* (Chicago: University of Chicago Press, 1974[1968]), 141-79.

²⁴⁾ 『記念俳句集』、81。

「国旗」・正月・日の丸

秋夕の「初国旗」の句においては、悲哀ではなくむしろ落ち着きが感じられるものの、「ここはアメリカだ」と政治的に最も強く主張する素材を日本人にとって一番大きなお祝いである正月に詠み込んでいることが注意を引く。それに正月は日本の国家をも象徴する、最も日本らしいものであるといえるだろう。日系人にとって正月はたいへん重要だった。1943年1月1日は収容されて初めて迎える元旦で、新聞の“Famous Firsts”という記事では“First New Year Day: First New Year to be observed by Tuleans in the Project was January 1, 1943, with everyone looking forward to a brighter new year.”と取りあげられている。一世・帰米二世にとって元旦はなおのこと感慨深いものだった²⁵⁾。一世の佐々木笹舟は、父か兄弟が収容されているらしい二世の女性からの年賀の便りについて書いている。その手紙は

・・・斯う申し上げては失礼かも知じませんが、皆様は今度収容されましたのを、休暇でおいでになつたとお思ひになつて、お暮しになられたら如何でせうか。皆様は当然休暇に恵まるべき筈のものであり、又さうお考へになられたら、其所の生活ももつと愉快にお感じになられる事と存じますから。

私共は皆様を思ひ、皆様のお暮しを偲び、一時とても忘れは致しません。何卒皆様、楽しいお正月をお迎えになさる様にお祈り申し上げます。 一月一日

とあり、読み上げていた笹舟の「声もともするとうるみ勝ちになり、聞いてゐる寮友達も両の眼に涙を湛へて聞いてゐた」ということである。一方、帰米二世の藤田晃は日本敗戦後1946年の正月をトゥーリーレーク収容所で迎える。その日の日記からは、襟を正して一年の始まりである元旦を迎えているのは明らかである。

終戦後初めて迎える正月。・・・

新春というのには、あまりに淋しい年の始めである。現在隔離所に残っている人々が、日本の敗戦を意識している心の痛みが、この淋しさ、この静けさを助長しているのは疑いもない。・・・一生を通して、今年のような初春を迎えることも稀であろうことを思うと、この静寂な雰囲気の中にひそんでいる常用を認識し追求してみることが、私にとって意義のあることかも知れない²⁷⁾。

これらにみられるように、正月は収容所の日系一世・帰米二世の心のよりどころとなっていた。

秋夕の「初国旗」の句が与える日本的な印象は、「国旗」ということばから連想される日章旗とも関係している。日章旗と日の丸と正月は、時代的にみても連想しやすいことばの組み合わせであった。日の丸は太陽の象徴であり、国号の由来とも関係して「日出づる処」「日の本」を意味する。1911年の「小学校六年国語」にも「白地は我が国民の純正潔白なる性質を示し、日の丸は熱烈燃ゆるが如き愛国の至誠を示すものといふべきか」とあ

²⁵⁾ *Tulean Dispatch* 27 May 1943.

²⁶⁾ 佐々木笹舟「一本の手紙」*Ayumi*, 77-78. 原本は『拘留所の生活記』で、1950年に日本で出版された。

²⁷⁾ 藤田晃「帰還の季節——ある市民権離脱者の日記——」『南加文芸』13 (1971)、2-3; *Ayumi*, 9.

る。このような教育が修身、国語、音楽の三教科を通じて繰り返され、昭和に入ると軍歌にも取り入れられた²⁸⁾。現在も元旦に国旗を掲げる家があるが、軍国主義の色濃い太平洋戦争前ではなおのことその傾向は強く、祝祭日には各戸国旗を掲げようというキャンペーンも存在した。天皇や国家と関連し、元旦、紀元節、天長節がとくに重要な祝日であった²⁹⁾。またトゥーリレークで出版された日本帰還希望者による文芸誌『怒濤』の中には、日本を指して「あゝ、純白の地に旭日を以て描かれた明るき世界」という表現が使われている³⁰⁾。このように日章旗と元旦は、多くの起源を共通に持つ日本帝国主義のアイコンとして日本でもアメリカでも受け入れられていたのであろう。

元旦と日章旗と日の出との関連から、初日の出への日系人の思い入れも強い。トゥーリレークで詠まれた初日の出に関する句は、詠まれた場所を知らなければ作者のいる状況には想像も及ばないほど、いかにも深閑とした厳かな日本の正月といった情景を展開する。

高原に迎へて拝す初日かな 日章 (1)

初日影昔ながらの巖が嶺に 秀女 (2)

一句目ではトゥーリレークという高台にいる作者が山影から神々しく表れる初日の出を恭しく拝んでいる。二句目の作者は初日の出の荘厳な風景をみて畏敬に打たれている。「巖が嶺」という古風な表現が、太古から変わらぬ初日の出の神々しさを増す。

このようにみても、アメリカの象徴を前にして詠まれた秋夕の「初国旗」の句に出てくる要素には日本的なものが多く、しかもそれらの要素は国家としての日本をもっと強く象徴するものがからみあって生まれていることがわかる。しかしこれを日米両文化の融合とは呼びたいように思う。たとえば、前出の秀女による「神の一人子」と詠まれたシャスター山の句を思い返すと、その「神の一人子」という表現では、キリスト教の絶対神と日本の神体である山が溶け合い無理なく一つのものになっているのは明らかである。それに対して、秋夕の「初国旗」の句では、眼前に広がるアメリカ的光景という解釈と日本の心象風景の解釈といういわば二枚の絵が、ただ並んでかけられているだけという感覚の方が近い。アメリカの風景写真に日本語で色をつけたら、すっかり違う絵になりましたという感じなのである。句を詠もうという感動を呼び起こしたものは星条旗であったが、秋夕はそれを「国旗」ということばで詠うことで日本の正月のような情景を浮かび上がらせている。俳句の句形に守られて、この句では日米の国家的象徴が対立することなく共存しているのである。

星条旗への愛着

『記念俳句集』の他の句においても、アメリカの国旗に対する政治的な意識、感情のわだかまりのようなものを感じとることはできない。むしろ星条旗に対する愛着のようなものをよみとることができる。しかもアメリカの旗によって日本的な情景が展開されている。

²⁸⁾ 所功『国旗・国家の常識〔新版〕』（東京堂出版、1992）、82-85、111-13。

²⁹⁾ 瀬尾芳夫『国旗「日の丸」問答——祝祭日には各戸もれなく国旗を掲げませう』（1938?）；所功『日本の国旗・国歌——「日の丸・君が代」の歴史と意義』（国民会館、1995）、26。

³⁰⁾ 橋本京詩「巻頭言」『怒濤』3（1944）。篠田佐多江『『怒濤』解題』『日系アメリカ文学雑誌集成』第三巻によると、橋本は藤田晃と共にこの雑誌の編集にあっていた。

秋風のはためく旗の村に着き 糸女 (73)
 ながながと旗竿の影末枯に 亜狂 (65)

一句目の季節は秋、作者糸女は収容所を「村」と表現しているが、この表現により悲惨な収容所という印象が払拭されている。暑い夏を過ぎて風は穏やかにそよいでいる。「秋風」からは寂しげな夕方を連想するが、必ずしも句に暗い印象を与えるわけではない。というのもこれが日本人が秋の暮れ方を鑑賞する際のパターンで、秋の寂寥感を伴う美しさを詠む伝統的な方法である。この句ではアメリカの国旗が秋風と結びついて日本の秋の美を構成しているのである。収容者たちは畑作業などで柵の外に出ることを許されていたが、作者は夕暮れどきにどこかから戻ってくるところなのだろう、旗が空にはためいているのを遠くから目にして目的地が近いことを知る。そこは休息の地であり、作者は一日の疲れをそこで癒す。高い空に泳ぐアメリカの旗が収容所に向かう作者にそのような安堵感を引き起こしている。

二句目の季語は「末枯」、木々も葉をすっかり落とした冬の夕方のこと、作者は旗竿を眺めている。沈みかけた太陽が旗竿の影を長くうつす。その日、おそらく旗はもう降ろされてしまったのだろう、よけいに旗竿の先端は細くみえる。それはまるで裸木の先端のようにもみえる。ときは太陽がだんだん傾き、寒くて陰鬱な夜がこようとしているところで、収容所の中でふつうの生活とは切り離された心細い生活を送っている詩人の姿が目に見えぬ。この作者は林秋夕と一緒に『記念俳句集』を編集した、トゥーリーレークでの俳句活動の指導者安井亜狂だが、彼は長く病を患い収容所では長期にわたって入院し手術も受けている。ツーリーレーキ吟社同人によるもう一つの句集『還暦』は、そんな亜狂の回復と還暦を祝福し、忠誠テスト以降の移転先アイダホ州ミネドカ (Minidoka) 収容所で句会を催したときのものである。「重五」と題されているので端午の節句のころであろう。亜狂は

衣更て飄々として丘に立ち³¹⁾

と詠んでいる。還暦の赤い着物への更衣、病の寝間着を脱ぐこと、季節の衣替えが歌われ、細々とではあったが生きてこられたことへの感慨が感じられる。従ってここでのふつうの生活とは、鉄柵に囲まれた収容所の外の世界の他に健康な生活も読みとって良いだろう。旗竿の長い先細りの影に消えゆく彼の人生を重ねてみていたのかも知れない。竿にふだんはある旗のないことがことさら無をかき立てる。星条旗の欠如で作者は寂しさを募らせている。

星条旗は特別な状況に詠まれていただけでなく、日常生活においても何気ない感動を呼び起こしていた。

朝々の旗のラッパの爽やかに 秀女 (62)
 夕立来旗するすると下ろさるる 緑風 (34)

一句目、毎朝ラッパの音と共に収容所では旗を掲揚していたのであろう。作者は離れたところにおいてその音だけを耳にしているのかもしれない。作者は一日の始まりを告げるラッパの音を聞き、毎朝心新たにす。季節はわかりにくい、朝を重んじているところから

³¹⁾ 川本『日本の詩歌の伝統』、5。

³²⁾ 小池晩人によるあとがき、安井亜狂編『還暦』(1944)、55。Tulean Dispatch 11 Feb. 1943には六月の入院後の退院御礼が掲載されている；『還暦』、37。

しかし句の与える印象はこれほどまでに変わる。自由律俳句と違って、伝統的な定型俳句においては個人の感情を直接表現することはしない。イメージを重ね、そのイメージに感情を語らせる³⁴⁾。そのため、そのような形式に慣れ親しんだ読者は句の中のことばに引かれた情景、もしかしたら実際とはほど遠い情景を思い描くことになるのである。これら『記念俳句集』の星条旗に関連する句は、俳句の形式に則りアメリカの悠大な自然や風景を詠みつつも、伝統的日本の美を醸し出している。逆にいえば、日本語と定型句のもつその形式によって、日系人作者たちの真の思いは奥深く包みこまれているのである。

おわりに

俳句は日本文化で前提とされているものをとくに多く含んでいるため、文化の表象媒体としてのことばへの依存度が大きい。日本語の力に差のある日系一世・帰米二世と純二世の間の日本語の俳句をめぐるコミュニケーションの難しさ、自分の考えを適切に伝えられないもどかしさは、ヒサエ・ヤマモトの代表的短編“Seventeen Syllables”に象徴されている³⁵⁾。二世の娘ロージーは一世の母が創る俳句を評価することができない。その句の良し悪しを母に聞かれ“Yes, yes”と答える。

The truth was that Rosie was lazy; English lay ready on the tongue but Japanese had to be searched for and examined, and even then put forth tentatively (probably to meet with laughter). It was so much easier to say yes, yes, even when one meant no, no.³⁶⁾

ロージーは日本語とその背景の日本文化に詳しくないため母の詠む俳句を理解できない。また自分の意見を的確にかつ母を傷つけないように日本語で伝えるすべも、彼女は持っていない。

ヤマモトはボストンに収容され、新聞に載った初の短編にその片鱗はうかがえるように、日系人間のことばの違い・感性の違いの問題に直面していた。するとロージーのこの二回の“yes”と“no”は示唆的である。多くの日系アメリカ人が家族としてより平穏無事な生活を送れるようにと、忠誠テストの質問27と28に“Yes”“Yes”と答えた³⁷⁾。恐らくもっと多くの日系人が“No”“No”と答えたかったことだろう。アジア系アメリカ文学批評のイレイン・キムが指摘しているように、どの日系アメリカ人も自由意思と全体への調和という両方の理想を常に持っていた³⁸⁾。二つは相矛盾したものであるから、現実の世界では譲歩しなければならない。また批評家リサ・ロウは、日系アメリカ小説は日本人であるこ

³⁴⁾ 川本『日本の詩歌の伝統』、73。

³⁵⁾ Zennobia Bazler Mistri, “Seventeen Syllables’: A Symbolic Haiku,” *Studies in Short Fiction* 27 (1990):198.

³⁶⁾ Hisaye Yamamoto, “Seventeen Syllables” in *Seventeen Syllables and Other Stories* (Latham, NY: Kitchen Table, 1988), 8.

³⁷⁾ Imai Kumei Teruko, “‘Skeleton in the Closet’: The Japanese American *Hokoku Seinen-dan* and their ‘Disroyal’ Activities at the Tule Lake Segregation Center during World War II,” *The Japanese Journal of American Studies* 7 (1996): 70-71; 松下志朗『カリフォルニア日系知識人の光と影』(明石書店、1994)、155; 瀧田佳子「母の娘語り」油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ』(東京大学出版会、1999)、224。

³⁸⁾ Elaine H. Kim, *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*. (Philadelphia: Temple University Press, 1982), 172.

とを主張してアメリカの国賊となるか、無条件にアメリカ社会に同化して日本的要素を断つかの選択を迫られた人々の物語であるという。ロウはさらに、そこでは登場人物の二つの国への忠誠を突き詰め、和解や決別させることを避けていると分析する³⁹⁾。結局のところ、日系アメリカ文学は日系アメリカ社会としての確固としたアイデンティティに対する答えを持ってないという特徴があるのだろう。

このことは大岡の、日系アメリカ人による短歌では作者が自分のおかれた状況を受け入れて結論を出すことができないという指摘と通ずるものがある⁴⁰⁾。短歌よりもさらに短い俳句において、このことはとくによく当てはまるのではないかと思う。伝統的な俳句は切りつめたことばと形式によって真の感情を包み隠しうる。俳句の作者は日本語を第一言語とし、日本の教育を受けて育った一世と帰米二世がほとんどであった。彼らは収容所の中でアメリカの自然と風物に囲まれ、日常のささやかな喜びやちょっとしたできごとについて、さかんに日本語で俳句を詠んでいた。ときにはそれが星条旗という、究極のアメリカの象徴を織り込んだ句になることもあった。しかしそれらの句からは、戦時中に二つの国の間で揺れる忠誠心や、自分が日本人とアメリカ人の一体どちらなのかという苦悩、そしてどちらとして行動すべきなのかという迷いを直接知ることができない。また日本人、アメリカ人のどちらかというのではなく、両方の文化を兼ね備えた新しい集団に属する人間であるという安心感も見い出すことはできない。彼らの俳句には、日本語という言語の持つ文化の包みにおおわれて、自分のいる立場、自分のアイデンティティを明確にしようにもできない状況にいる日系人の、祖国の対戦国であるアメリカに対する複雑な感情が、結着をみないまま存在している。詩語を生かす日本語の俳句は、まさにそういう曖昧さ微妙さを許す表現方法でもあったのである。こうして、アメリカの風光が生み出す感動によって日系アメリカ人が詠んだ日本語俳句は、幾層もの深い豊かな解釈と余韻を読者に与えてくれる。

* 本稿は日本比較文学会東京支部大会（2000年10月21日、於青山学院大学）での口頭発表「『国旗』と日系アメリカ俳句——太平洋戦争中の収容所から——」に加筆訂正を施したものである。

³⁹⁾ Lisa Lowe, *Immigrant Acts: On Asian American Cultural Politics* (Durham: Duke University Press, 1996), 48.

⁴⁰⁾ 大岡『北米万葉集』、19-20。

“*Kokki*” and “the National Flag”:
Japanese American *Haiku* in Tule Lake during the Pacific War

〈Summary〉

Junko Araki

This paper aims to define the Japanese American identity during the Pacific War, exploring *haiku* composed in Japanese on the “National Flag,” or “*kokki*,” at the interment camps. Given that the *Issei* and *Kibei Nisei* created the *haiku* within the barbed wire fences of the compounds, the actual flag within their visual field was the American Stars and Stripes flying on the post. When read in Japanese, however, “*kokki*” probably resonated as if it were the Rising Sun for the Japanese American *haiku* poets and readers. That is because in *haiku* imagery, emotions are expressed through words and aesthetic connotations condensed into only seventeen syllables. This succinct structure provides readers broad room for interpretation, and such room is usually fixed within Japanese culture. Due to the traditional artistic construction of *haiku*, these poems do not suggest negative feelings, if any, towards the United States. But since the Flag is one of the most nationalistic symbols, the dual nationality revealed in the *haiku* implies the inner identity conflicts among the Japanese American poets. The authors composed *haiku* about the flag, integrating the beauty of the surrounding environment into their writing. In the meantime, the true feelings of the poets were buried deeply underneath the Japanese language. The American beauty inspired the Japanese American poets to create *haiku* in Japanese, and its aesthetic form presents readers manifold layers of interpretation.